History of Basketry in Ishikawa Prefecture from an Archaeological Perspective

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2020-12-08
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00060222

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

考古学的視点から見た石川県の編物の歴史

松永篤知

はじめに

カゴや敷物などの編物〔1〕は、普段目立たない道具であるが、実のところ生活のあらゆる分野に関わる重要な器物である。現代においては代替品が多くなったために、過去の時代に比べるとその重要性は低くなったが、それでも身の回りを見渡すと非常に多くの編物が使われていることに気づく。カゴ・ザル・スダレ・ナベシキなどと言えば、どの家庭でもいくつか出てくるはずである。

石川県域においても、先史時代から様々な編物が作り使われてきた。カゴ・敷物・編布などの実物あるいは痕跡が県内の遺跡から見つかることがあり、少なくとも縄文時代以来、確実にその存在を追跡することができる。

本論では、石川県の編物の歴史について、考古学的視点を主軸に通観する。本県域において、縄文時代から現代に至るまで、どのような編物がどのように製作・使用されて来たのか、具体的な考古資料を挙げながら、その背景を含めて追いかけてみたい。

一、研究略史

石川県の編物の歴史を見る前に、石川県における考古学的編物研究の歩みを整理しておこう。

そもそも、日本考古学における編物研究の歴史は、一八七七年におこなわれた東京都大森貝塚の発掘調査をもって始まる。東京大学の「お雇い外国人」エドワード・シルヴェスター・モース氏の手によるもので、この時すでに縄文土器の底部に編物の圧痕が残されることが指摘されている（モース一八七九）。

その後、坪井正五郎氏（坪井一八九九）や杉山寿栄男氏（杉山一九四二）、小林行雄氏（小林一九六四）らの研究が続き、研究の基礎が築かれた。一九六〇年代末から一九七

○年代には、荒木ヨシ氏（荒木一九六八・七〇・七一）、安孫子昭二氏（安孫子一九七一）らによって縄文時代の編物圧痕の地域性が指摘されている。さらに、一九八〇年代以降は、植松なおみ氏の研究（植松一九八〇）を契機として、カゴなどの実物資料研究、縄文土器底部の敷物圧痕研究[2]がそれぞれ展開し、特に近年は植物学的視点に基づく縄文時代編物研究が目立つ（あみもの研究会二〇一二、工藤二〇一七など）。

そのような日本考古学の流れの中において、石川県は、縄文土器底部の敷物圧痕に良好な資料が多いことから、一九七〇年代から一九八〇年代にかけて、敷物圧痕研究が他県よりも進展した。渡辺誠氏（渡辺一九七六）、川端敦子氏（川端一九八三）、山本直人氏（山本一九八六・八九）らが、網代圧痕やスダレ状圧痕、編布圧痕、カゴ底圧痕といった各種敷物圧痕を観察・分類している。中でも山本氏は、敷物圧痕に限らず、能登町真脇遺跡をはじめとして、カゴ類の詳細な観察、圧痕資料の分類および時期別統計、民俗事例との比較など、多角的な研究をおこなっており、県内における編物研究の代表例に位置づけられる。

近年は、川添和暁氏（川添二〇一二）や本田秀生氏（本田二〇一二）による研究（前者は民俗考古学的視点、後者は植物考古学的視点を主軸とする研究の一部）があり、石川県を含む北陸地方の編物の様相が示されている。

その他、全国的な編物実物資料研究の中で石川県の編物が扱われることがあり、具体例として黒沼保子氏（黒沼二〇〇九）や堀川久美子氏（堀川二〇一一）、柳原梢子氏（柳原二〇〇八）らの論考が挙げられる。

なお、東アジア的視点による編物研究（松永二〇一三ａなど）を続けている筆者も、一般向けの小冊子ではあるが、石川県を含む北陸地方の縄文時代・弥生時代編物について簡単にまとめたことがある（松永二〇一三ｂ）。その中で筆者は、北陸地方の縄文時代編物の特徴として「針葉樹・マタタビ材の使用、もじり編みの卓越、東北型網代圧痕（軟質な素材による一本超え一本潜り一本送りの網代圧痕）の存在、二本超え二本潜り一本送り中心の網代圧痕、籃胎漆器の存在」があり、弥生時代編物の特徴として「針葉樹・マタタビ材の使用、箕の存在、カゴの定型化、被籠土器（カゴに包まれた壺）の存在」があることを指摘した。針葉樹材・マタタビ材・もじり編み・東北型網代圧痕は「北陸～山陰地方あるいは東北～北陸地方にかけての日本海側地域共通の特徴で、その背景には多雪地帯の環境など」があり、二本超え二本潜り一本送り中心の網代圧痕は「北陸・東海

地方以西の西日本の特徴」、籃胎漆器は「縄文晩期における漆工芸の卓越が背景にあるもの」と見られ、さらに弥生時代の特徴である箕は「新器種の導入」、カゴの定型化は「西日本的な共通規範の成立」、被籠土器は「壺形土器の使用」が背景にあるものと見られる。

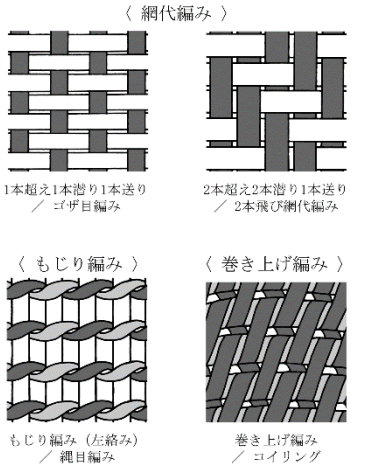
このように、石川県では、縄文時代を中心に編物研究がおこなわれてきたが、通史的な研究がきわめて少ないことが指摘できる。そこで、次では管見に触れた県内編物資料の具体例を時代順に見ていくことにする。

二、各時代の編物諸例

（一）縄文時代

日本列島における編物の初源は、おそらく旧石器時代に遡ると考えられるが、実際に明確な物的証拠が得られるのは、縄文時代草創期からである（松永二〇〇八b）。石川県では、現時点でそこまで古い編物資料は見つかっていないが、少なくとも縄文時代前期以降、実物資料・圧痕資料ともに存在が確認でき、地域的・時期的な特徴もある程度抽出することができる[3]。

縄文時代前期の編物資料の具体例は、能登町真脇遺跡のカゴ類（図2-1）である（山本一九八六）。ヒノキ材を用いた密なもじり編みによるもので、前期後葉の福浦上層式に属する。同様の密なもじり編みのカゴ類は、同じ頃（縄文時代前期後半）の富山県富山市小竹貝塚（松永二〇一四）や、福井県若狭町鳥浜貝塚（鳥浜貝塚研究グループ一九八五）でも見つかっており、該期の北陸地方の特徴として捉えられる可能性がある。同遺跡では、縄文時代前期末～中



（模式図の上：編み方大別、下：編み方細別／民具呼称他）

図１　主な編み方の模式図（松永 2013b）

期初頭の層位に属するスダレ状圧痕（条材を絡め編む、もじり編みの敷物圧痕）もわずかながら確認されており、前期後半以降、もじり編みの編物がカゴや土器製作用敷物として製作・使用されていたことがうかがわれる。

縄文土器底部の敷物圧痕は、土器の平底化が完全に定着する中期以降、加賀地域・能登地域を問わず、県域で広く見られるようになる。特に中期前葉～中葉には、もじり編みのスダレ状圧痕が卓越し、同じ頃の東北～北陸地方にかけての日本海側地域に共通の特徴として捉えられる。例えば、金沢市角間遺跡（金沢大学構内遺跡の一つ）では、中期前葉の縄文土器底部に敷物圧痕が残されているが、編み方が確認できるものはいずれもスダレ状圧痕（図2-2）である（佐々木・妹尾・横山二〇一七）。石川県域では、中期後半以降も、（遺跡ごとの多寡はあるが）縄文時代晩期までスダレ状圧痕が認められ（松永二〇〇八a・二〇一三a）、さらにより高度なもじり編みの敷物圧痕であるカゴ底圧痕（もじり編みのカゴ底の圧痕、図2-5）や編布圧痕（もじり編みの布の圧痕、図2-6）も少数ながら存在する（川端一九八三、川端・渡辺ほか一九八三、山本一九八九）。これらの資料は、縄文時代の石川県域において、もじり編みが高度な技術水準に達していたことを如実に物語っている。

ただし、縄文時代中期以降、網代圧痕（条材を単純交差させる、広義の網代編みの敷物圧痕）も少なからず認められ（図2-3・4）、中期中葉～後葉の小松市中海遺跡（湯尻・山本ほか一九八七）や中期中葉～後葉の能美市莇生遺跡（辰口町教育委員会一九七八）、後期中葉の金沢市馬替遺跡（南ほか一九九三）のように、遺跡によっては網代圧痕（一本超え一本潜り一本送りや二本超え二本潜り一本送りなど）が主体になることもある。また、石川県域の網代圧痕の中には、植松なおみ氏が東北型網代圧痕（植松一九八一）と名付けたボコボコとした質感の網代圧痕も存在することが指摘されており（川端・渡辺ほか一九八三、湯尻・山本ほか一九八七）、縄文土器製作用の敷物だけでもかなり多様な編物が製作・使用されていたことが分かる[4]。

また、縄文時代後期から晩期にかけても、実物資料が見つかっており、後期～晩期の金沢市米泉遺跡（西野・岡本ほか一九八九）や晩期の金沢市中屋サワ遺跡（楠・谷口・前田・向井二〇〇九、谷口・谷口・向井二〇一〇）、志賀町鹿首モリガフチ遺跡（山本一九八九）の例が知られる。特に、漆漉し布としての編布（米泉遺跡）、カゴ（タケササ類・広義の網代編み）に漆を塗布した籃胎漆器（図2-7、米泉遺跡・中屋サワ遺跡・鹿首モリガフチ遺跡）が注目さ

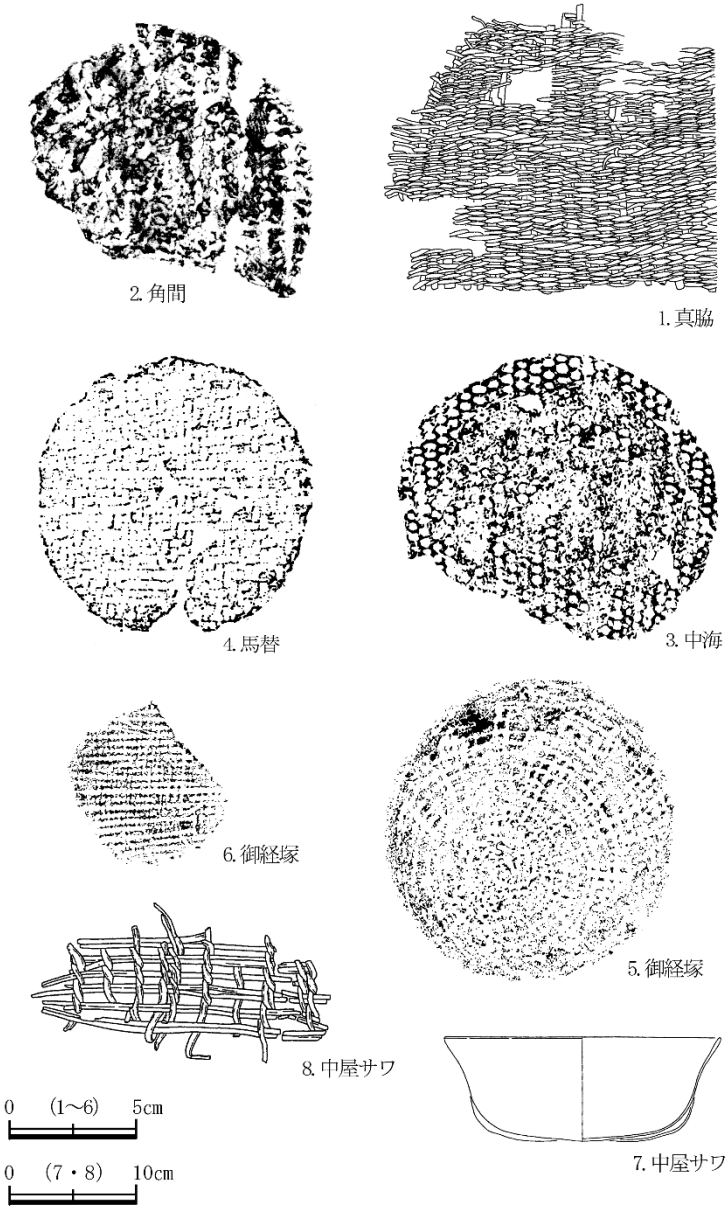


図２　縄文時代の編物資料（図版出典は各発掘報告）

れる。これらは、高度な漆工技術を背景とする縄文時代晩期の代表的編物である。加えて、中屋サワ遺跡では、スギ・マタタビなどを素材とする、もじり編みの編物片も見つかっている（図2-8）。

石川県域における編物資料は、実のところ縄文時代のものが最も多い。実物資料・圧痕資料の情報を合わせることで、きわめて豊かな編物文化が浮かび上がる。

（二）弥生時代

弥生時代には、おそらく縄文時代との土器製作技術の違いなどを要因として、敷物圧痕の数が激減するため（ごく少数ながら網代圧痕・もじり編み圧痕は存在する）、実物資料が中心となる。具体的には、弥生時代中期から後期にかけての金沢市藤江B遺跡（松山・三浦二〇〇一）、金沢市西念・南新保遺跡（楠ほか一九八九）、金沢市戸水C遺跡（山本一九八九）、小松市八日市地方遺跡（橋本・福海・宮田二〇〇三、樫田・下濱・能城・佐々木・小林・鈴木ほか二〇一六、中屋二〇一八b[5]）、小松市白江梯川遺跡（久田・中川・本田・佐々木二〇〇八）、宝達志水町荻市遺跡（川畑・沢辺ほか一九九八）から、マタタビやアスナロなどを素材とする、広義の網代編みを主とするカゴや箕などが出土している。

弥生時代の編物に関して、特に重要なことは、カゴの定型化である（図3-1～3）。弥生時代中期～後期の西日本を中心として、口縁部が巻き縁または矢筈巻き縁、口縁部付近や体部中央が絡め編みの類、体部が一本超え一本潜り一本送りや二本超え二本潜り一本送り、底部が経条・緯条二本一組の二本超え二本潜り一本送りまたは一本超え一本潜り一本送りとなる鉢形のカゴ類が、共通して認められるのである。これは、当時の編物に一種の共通規範が存在していたことを示すものとして理解できよう（松永二〇一三a・b）。石川県もその例に漏れず、戸水C遺跡・八日市地方遺跡・白江梯川遺跡・荻市遺跡で同様のカゴが見つかっている。加えて、八日市地方遺跡に例があるように、箕の存在も弥生時代から確認できる。

なお、八日市地方遺跡などでは、編物の痕跡が器面に残る被籠土器（図3-4）も認められ、壺をカゴで包むという、縄文時代とは異なる編物のあり方が注目される。

（三）古墳時代

古墳時代については、縄文時代や弥生時代に比べて情報が少ないが、能美市和田山二号墳（小林一九六四、文化財

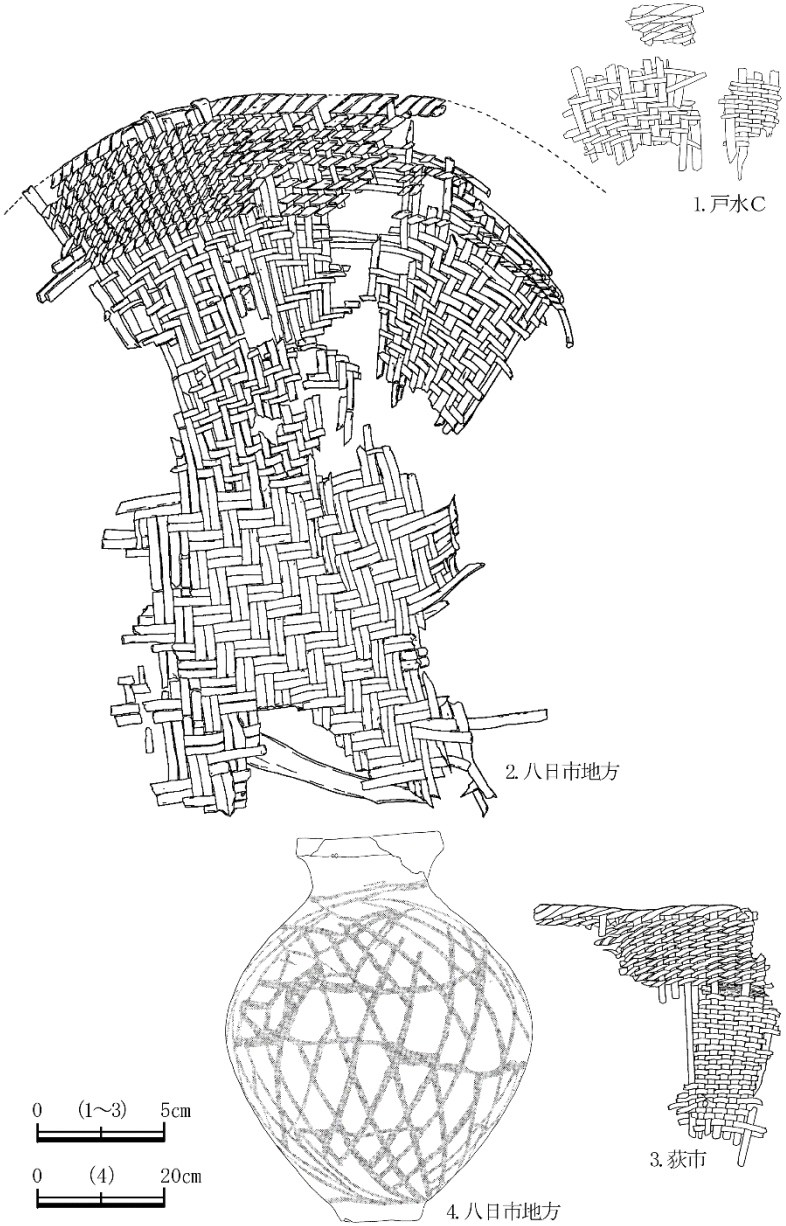


図３　弥生時代の編物資料（図版出典は各発掘報告）

保護委員会一九五七）や加賀市八日市遺跡（中屋二〇一八a）で網代編みの実物資料が見つかっている。

和田山二号墳では、三本超え三本潜り一本送りと二本超え二本潜り一本送り（経条・緯条ともに二本一組）の網代片がそれぞれ一点ずつ出土している。銅鏡を包んでいたか、あるいは棺底に敷かれていたかで棺内にあった編物が、銅鏡に接していた部分のみ遺存したものとされる。

また、八日市遺跡では、古墳時代前期の水辺祭祀施設の可能性がある板組み遺構の周辺から、網代編みの敷物が出土しているという。

（四）古代

古代の編物は、加賀地域の金沢市荒木田遺跡（北野・鈴木・西尾ほか一九九五）、金沢市大友西遺跡（出越・谷口・前田二〇〇二）、小松市高堂遺跡（山本一九九〇）、小松市一針C遺跡（横山二〇一六・横山ほか二〇一七）で実物資料が見つかっている。

荒木田遺跡では、奈良時代（八世紀後半）の水場遺構から、スギ材を用いた二本超え二本潜り一本送りの網代編みのカゴが一点出土している（図4-1）

大友西遺跡では、平安時代前期に位置づけられる井戸の底に一・五m×〇・九mほどの大型網代（三本超え三本潜り一本送り）が敷かれた状態で出土している（図4-2）。

高堂遺跡では、九世紀後半～十世紀初頭頃の溝から、縁巻きのある三本超え三本潜り一本送りの網代編みのカゴが一点出土している。

一針C遺跡では、古代に位置づけられる外枠横板組・内枠くり抜きの井戸底に、針葉樹の大型網代（年報の写真を見る限り三本超え三本潜り一本送り）が敷かれた状態で出土しており、浄水目的が想定されている。

以上のように、石川県域における古代の出土編物は、いずれも広義の網代編みである。構造的に前時代の編物と違いはなく、技術系統的にはつながっていると理解して良いだろう。素材の樹種が判明している限り針葉樹ということも、一種の連続性を示しており注目される。

古代（以降）の編物に関して、ここで一つ問題を指摘しておきたい。古代に入り、文献資料に編物に関する具体的な記述が見られるのである（小林一九六四）。平安時代中期の延長五年（九二七年）に成立した『延喜式』「主計寮上」には、中男作物として能登国の「席」・「韓薦」・「折薦」・「菅薦」が記されている。これらのうち、席は長一丈・広三尺六寸、韓薦は長四丈・広七尺、折薦は長二丈・広三尺六寸、

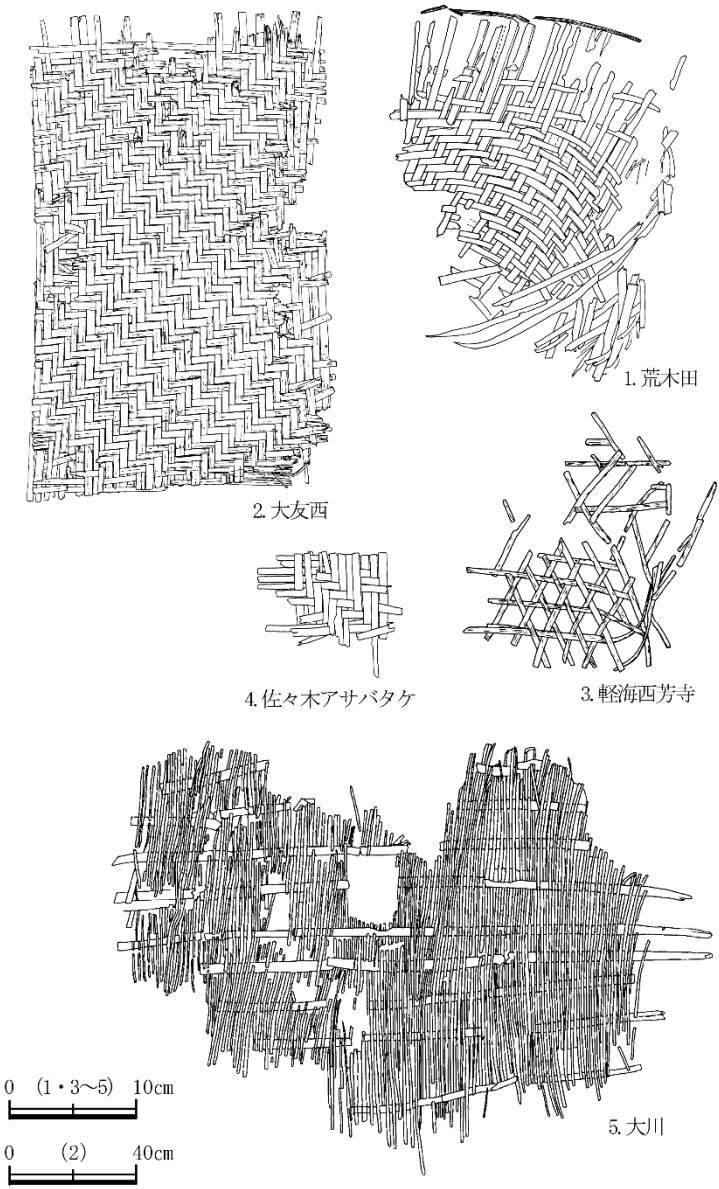


図４　古代〜近世の編物資料（図版出典は各発掘報告）

菅薦は長一丈二尺・広四尺であるという。一〇世紀の能登地域では、規格化された平面的編物が作られ、都に納められていたのである。

しかし、考古資料では、このことを確認することができない。管見の限りであるが、敷物に規格があったことどころか、草本類の敷物の存在自体、現時点の能登地域で確認できない。おそらく、草本類を素材とする敷物（席・薦）の類は、各種編物の中でも特に脆弱なため、埋蔵状態では遺存しにくいのであろう。考古学研究者は、このことに留意しなくてはならない。当然先史時代については無理な話であるが、歴史時代においては、考古資料と文献資料を照らし合わせる作業の必要性を強調しておく。

（五）中世

中世においても、加賀地域で編物の実物資料が出土している。金沢市木越コウタイジン遺跡（金沢市埋蔵文化財センター二〇一六）、金沢市木越光徳寺跡（金沢市埋蔵文化財センター二〇一六）、金沢市千田北遺跡（金沢市埋蔵文化財センター二〇一七）、小松市佐々木アサバタケ遺跡（山本一九八九）、小松市軽海西芳寺遺跡（岩瀬・柿田・宮田一九九八）、小松市一針C遺跡（中森・安中二〇一五、横山二〇一六）から、網代編みの編物が見つかっている。

木越コウタイジン遺跡では、河川跡から中世に属する約一・四m×約一・一mの大型網代（年報の写真を見る限り二本超え二潜り一本送り）が出土しており、建物の壁材とされている。

木越光徳寺跡では、中世寺院の区画溝の岸際で網代（年報の写真を見る限り二本超え二潜り一本送り）が出土しており、壁材を護岸に転用したものと推測されている。

千田北遺跡では、中世に位置づけられる大型網代（二本超え二潜り一本送り）が土坑内から出土している。

軽海西芳寺遺跡では、一二世紀末～一三世紀初頭の井戸から、広義の網代編みに属する六ツ目編みの編物片が一点出土している（図4-3）。カゴの類であろう。

佐々木アサバタケ遺跡では、一四世紀の井戸から、ヒノキ材を用いた縦芯材折り込み縁・網代編みのカゴが一点出土している（図4-4）。

一針C遺跡では、詳細は不明だが、中世に位置づけられる井戸からカゴ・箕（年報の写真を見る限りは網代編みの類）が出土しているという。

能登地域においても、穴水町に「なあげそうけ（菜上げ笊笥・名上げ宗家）」の話[6]があるように、中世に広義の

網代編み（ザル目編み）の編物が使われていたことは間違いない。今後、能登地域において、何らかの編物資料が出土することに期待したい。

（六）近世以降

近世以降については、城跡や城下町遺跡のような重要遺跡を除き、原則として埋蔵文化財行政の発掘調査対象とはなりにくい。そのため、考古学的視点（考古資料）に主軸を置く本論では、近世以降を一括する。

さて、近世以降の編物実物資料としては、小松市大川遺跡の例がある（川畑・岩本二〇一四）。タケササ類を素材とするザル目編み（一方の条材の間隔をあけた広義の網代編み）の編物が、江戸時代の町屋地区の溝跡から一点出土している（図4-5）。

また、加賀市大菅波コショウズワリ遺跡では、江戸時代前半の土坑に編物（詳細不明）が敷かれていたという（公財石川県埋蔵文化財センター二〇一七、横山二〇一八）。

その他、編物の存在を示す類推資料として、土人形がある。当時の人や動物、物を象った種々の人形の中に、編物を表現したものが含まれるのである。米俵が最も分かりやすいが、それ以外にもカゴや編笠を表現したものなどがあり（図5、金沢市宝町遺跡・鶴間遺跡、いずれも金沢大学構内遺跡[7]、佐々木・妹尾・横方二〇一七）、江戸時代に

図5　近世の土人形に見る編物表現（筆者撮影）

広く編物（広義の網代編み・もじり編み）が製作・使用されていたことを、直接的ではないが考古資料から知ることができる。

なお、近世・近代の編物は、伝統工芸や民具の形で現代に残っており、それらを見ることで近世以降の編物の姿をうかがい知ることができる。

竹細工（タケササ類を素材とする編物）は、県内各地で製作されているが（中村一九七七など）、金沢市では加賀藩細工所の流れを汲む「加賀竹工芸」が知られる（石川県伝統産業振興協議会一九九七）。加賀竹工芸は、網代編みを主体に高度な模様を編み出したものであり、一種の美術品として位置づけられるほど高い技術を誇る。これは、近世以降における工芸の精緻化を示すものと理解できるが、考古資料に見る生活道具としての編物と、技術的な根幹は変わらない。

また、白山市域では、白山麓におけるもじり編みのフカグツ（稲ワラの深靴）・テゴ（稲ワラの手籠）や巻き上げ編み（芯材を巻き材で巻き上げる技法）のメッスギイレ（稲ワラの飯櫃入れ）などが知られるが（天野・小林ほか一九七三）、特に旧鶴来町域において、伝統工芸として檜（桧）細工（ヒノキを素材とする編物）が製作されている（石川

図６　現代の県内工芸に見る編物（筆者撮影）

県伝統産業振興協議会一九九七、山本一九八九）。その始まりは、約四百年前に旧尾口村深瀬を訪れた旅の僧が庄屋の助太夫に教えた笠作りであり、以来同地では檜細工が村の経済を支える産物であったという（木越一九九三）。昭和五〇年、手取川ダム建設により、深瀬地区は水に沈んでしまったが、鶴来町に移り住んだ人々により技術は受け継がれ、白山市となった今も網代編みのカゴなどの生産が続けられている（図6左[8]）。

白山市では、旧河内村域にこつら細工（マタタビを素材とする編物）という伝統工芸もあり（中田一九九三）、広義の網代編みでカゴなどが製作されている（図6右）。

その他、羽咋市菅池の箕（タケササ類とフジを素材とするザル目編みの箕）や、小松市の小松表（イグサの畳表[9]）、すでに作られなくなったが輪島市東の箕（タケササ類とアテ＝ヒノキアスナロを素材とするザル目編みの箕）など（榎二〇一五、田中一九九三）、石川県の伝統工芸・民具には実に多種多様な編物が認められる。

近世・近代の編物は、これらと同様のものであったと推測されるが、考古資料からこれほど豊かな編物文化を描き出すことは難しい。

また、明治時代以降、西洋から伝わった棒針編み・鉤針編みの編物（輪奈編みの類）が全国に普及したことが知られているが（森・櫻井二〇一二）、これも考古学的には追跡が難しい歴史的事実である。石川県においても、同様の編物が広まったであろうことは疑いようもないが、そのことは文献資料や民具資料といった、考古資料以外の手がかりから補完する必要がある。

三、考察

縄文時代から現代に至る、石川県の編物についての考古学的情報および関連情報は、これまで見た通りである。それらを簡単にまとめたものを図7に示す。この図に基づき、考古学的視点から石川県の編物の歴史について、若干の考察をおこないたい。

縄文時代においては、実物資料と圧痕資料から、広義の網代編みともじり編みによる多様な編物（カゴ・籃胎漆器・漆漉し布としての編布・土器製作用敷物など）の製作・使用が見て取れる。実物資料について、もじり編みの編物は針葉樹やマタタビを素材とし、籃胎漆器はタケササ類を素材とするという点が特筆される。また、晩期における、高度な漆工技術との関わり（籃胎漆器・漆漉し布）も重要で

時　代	考古資料から得られる編物情報	考古資料以外の編物情報
縄文時代	・もじり編みのカゴなど ・針葉樹材・マタタビ材の使用 ・敷物圧痕（スダレ状圧痕･網代圧痕・編布圧痕・カゴ底圧痕）の多様性 ・籃胎漆器（タケササ材）・漆漉し布	
弥生時代	・敷物圧痕の減少 ・広義の網代編みのカゴの定型化 ・箕の存在 ・針葉樹材・マタタビ材の使用 ・被籠土器の使用	
古墳時代	・古墳の棺や板組み遺構に伴う網代編みの編物	
古　代	・井戸などの遺構に伴う網代編みの編物（大型網代・カゴ） ・針葉樹材の使用	・『延喜式』能登国の中男作物に席・薦の記述
中　世	・井戸などの遺構に伴う網代編みの編物（大型網代・カゴ・箕） ・針葉樹材の使用	・穴水町「なあげそうけ」
近世以降	・タケササ材のザル目編みの編物 ・土坑に敷かれた編物 ・編物表現のある土人形	・加賀竹工芸・檜細工・こつら細工・白山麓民具など多数 ・タケササ材・針葉樹材・マタタビ材の使用 ・近代～、棒針・鉤針編み

図７　石川県の編物についての考古学的情報および関連情報

ある。圧痕資料については、スダレ状圧痕と一本超え一本潜り一本送り・二本超え二本潜り一本送りの網代圧痕を中心に、東北型網代圧痕、編布圧痕、カゴ底圧痕が加わるという敷物圧痕の組合せが特徴的である。

弥生時代においても、実物資料と敷物圧痕が存在するが、特に実物資料について、カゴの定型化や箕・被籠土器の出現といった新出の要素が加わる。しかし、針葉樹材やマタタビ材の使用などについては、前時代と変わらない。

縄文時代・弥生時代については、このような特徴を示すが、研究略史の中で触れた、筆者が指摘する（松永二〇一三b）北陸地方における先史編物の特徴（日本海側地域的特徴・西日本的特徴など）および背景（多雪地帯の環境、縄文時代晩期における漆工芸の卓越、弥生時代における西日本的な共通規範の成立や新器種の導入、壺形土器の使用など）の範疇で捉えて特に矛盾はない。

ロクロが登場する古墳時代以降は、敷物圧痕資料はまず残らないものと見られ、数少ない実物資料に基づいて各時代・各時期の編物を理解するほかない。

古墳時代については、古墳の棺や板組み遺構に伴って、網代編みの編物が確認できる。

古代においては、井戸などの遺構に伴う大型網代や網代編みのカゴが認められ、針葉樹材の使用が確認できる。

中世においても、広義の網代編みの大型網代・カゴ・箕が確認でき、やはり針葉樹材の使用が判明している。

このように、古墳時代から中世にかけて共通するのは、広義の網代編みの編物であり、同技法によってカゴや敷物などが製作・使用されている。特に、古代や中世の遺跡においては、遺構に伴って大型の網代が見つかる例が少なくない。針葉樹を素材とし、その太い条材を単純交差させて、広い面積の網代を製作し、構造物の一部に応用していたことが分かる。

考古資料としての情報が少ない近世以降も、県域各地で様々な編物が製作・使用されていたようである。近世には、タケササ類を用いたザル目編み（広義の網代編み）の編物や土坑内の敷物の実物資料のほか、土人形の編物表現（米俵・カゴ・編笠など）から網代編みやもじり編みの編物の存在を知ることができる。その近世の編物技術を受け継いだであろう編物が、現代においても生産されている。それらのうち、民具資料にはもじり編みや巻き上げ編みの編物も認められるが、加賀竹工芸・檜細工・こつら細工のように、伝統工芸として認知されているものは、いずれも広義の網代編みの系統に属している。

このように見ると、石川県の編物は、古くはもじり編みが主体であったが、時代を下るほど網代編みの系統（一本超え一本潜り一本送り・二本超え二本潜り一本送り・三本超え三本潜り一本送りなど）が連綿と続いているように見受けられる。少なくとも、広義の網代編みを軸に、基本的な技術が受け継がれてきたことは事実であろう。

ただし、比較的丈夫な素材を用いる、網代編みの編物の「遺存しやすさ」も忘れてはならない。古代の資料について指摘したように、歴史時代のもじり編みや巻き上げ編みは、腐朽しやすい草本類（スゲや稲ワラなど）を用いることが多く、その場合、遺物として残る可能性はきわめて低くなる。そのため、結果として考古資料には網代編みが目立つという要素があることを指摘しておきたい。

また、タケササ類以外に針葉樹（スギ・ヒノキ・アスナロなど）やマタタビを使用するという、日本海側地域・多雪地帯的な素材選択の特徴も、先史時代から現代に至るまで続いている事実である。傾向として、縄文時代においてはもじり編みに針葉樹やマタタビを選択していたのが(10)、弥生時代以降になると同素材を網代編みに用いるように変わっていることも興味深いが、根幹をなす素材利用の知識はつながっているものと考えられる。

おわりに

本論では、主に考古資料を通じて、石川県の編物の歴史について検討してみた。通史的な研究がほとんどなかった状況から、少しでも前進したという点で、学術的な意義は十分にあろう。本県では、縄文時代から現代に至るまで、針葉樹・マタタビ・タケササ類などを用いて、広義の網代編み・もじり編みのカゴや敷物などが、製作・使用され続けてきたのである。考古資料という物的証拠をもって確認できたこれらの事実は、決して疑う余地がない。

ただ、加賀地域と能登地域の比較くらいは実施したいところだったが、考古資料の分布に明らかな偏りがあり（実物資料の分布が金沢市・小松市域に集中）、現時点ではそこまでの議論もできなかった。これは、やがて資料が充実した時の課題としておきたい。

また、歴史時代の編物については、文献資料や伝世資料、民具資料なども積極的に収集して、考古学以外の視点からの補完や検証が必要であることを痛感した。多方面からのご意見・ご批判を頂ければ幸いである。

本論は、第五九回北陸史学会大会での同名口頭発表をもとにして、大幅に情報（現時点で一般公開されているものに限る）を追加・修正した上で論文化したものである。口頭発表および論文投稿の機会を与えて下さった、金沢大学の足立拓朗先生・田中俊之先生・吉永匡史先生をはじめ、北陸史学会の皆様に心より感謝申し上げます。また、これまでの研究において、石川県埋蔵文化財センターや金沢市埋蔵文化財センター、白山ろく歴史民俗資料館の方々に各種編物資料を実見させて頂いたことが、本論の基礎になっており、そのご厚意に改めて御礼申し上げます。最後に、本論の学術的な背景には、名古屋大学の山本直人先生、金沢大学の中村慎一先生の多大なご指導があることを明記しておきます。

注

（1）筆者は、編物を「細長い植物素材を組んだり絡めたり巻き上げたりして平面的ないし立体的に形成した器物」と定義している（松永二〇一三a）。

（2）「敷物圧痕」とは、土器製作時に使用されていた敷物の圧痕の総称である。編物以外に、織物や植物の葉などが知られる（松永二〇〇四）。

（3）先史時代の編物資料について、数量などの詳細は、別稿（松永二〇一三a）の付表（資料一覧表）を参照されたい。

（4）石川県域では、縄文土器底部に巻き上げ編みの敷物圧痕の存在も指摘されている。本田秀生氏（本田二〇一二）によれば、七尾市三室まどかけ遺跡や白山市乾遺跡に当該資料があるという。ただ、従来の日本考古学では、稲作の伝播と共に巻き上げ編みが大陸から入ってくると考えられており（渡辺一九九四）、その位置づけは慎重に検討しなければならない。また、縄文時代前期には七尾市通ジゾハナ遺跡（河合・山本・安一九九七）などで底部に連続刺突を施している資料が認められるが、一見すると巻き上げ編みに似ている。このような例も含め、縄文時代の巻上げ編みの存否やあり方については、機会を改めて議論したい。

（5）八日市地方遺跡では、近年も発掘調査が実施されており（林二〇一八、中屋二〇一八b）、新たなカゴなどが出土している。本遺跡の資料は、北陸地方・弥生時代の編物実物資料として非常に重要であり、正式な報告を待ちたい。

（6）穴水町歴史民俗資料館・長家史料館のリーフレットに、穴水町指定文化財の金箸印馬幟とともに「なあげそうけ」の話が紹介されている。長家では、「菜上げ笊笥」を「名上げ宗家」と解釈して、馬幟としたという。この話を題材とした、村上真寿美氏の児童書（村上二〇〇七）も刊行されている。なお、現在穴水町では、長谷部まつりに合わせて、金色に塗ったタ

ケ製ザル（笊笥）を家・商店の玄関先に吊るして飾るようにしており、町の盛り上げに貢献している。

（7）金沢大学構内遺跡（角間遺跡・宝町遺跡・鶴間遺跡）の出土遺物は、本論の執筆時点では金沢大学埋蔵文化財調査センターの所蔵品であるが、近い将来に金沢大学資料館へ移管する予定である。

（8）図6の編物（檜細工・こつら細工）は、筆者が金沢大学の大学院生だった頃（二〇〇〇年代初め）に、合併前の鶴来町・河内村でそれぞれ購入したものである。

（9）小松表は、一四六〇年頃の天然イグサ発見を端緒とし、一六〇一年には生産されていた畳表である（田中一九九三）。一六四〇年に小松城に隠居した前田利常が、このイグサ栽培と畳表生産を奨励したという。なお、畳表は、その製作行為を「織る」と表現することも多いが、本論では便宜的に編物に含めた（素材や構造からの暫定的な判断による参考事例として）。

（10）東北型網代圧痕の原体について、マタタビを素材としている可能性が指摘されている（渡辺一九九六）。そうであれば、縄文時代の網代編みももじり編みと同様、マタタビ材を使用していたことになる。

参考文献

安孫子昭二　一九七一「網代底について」『平尾遺跡調査報告Ⅰ』平尾遺跡調査会　一七二～一七四頁

天野武・小林忠雄ほか　一九七三『白山麓　民俗資料緊急調査報告書』石川県立郷土資料館

あみもの研究会　二〇一二『シンポジウム　縄文時代の編組製品研究の到達点―地域性と素材に注目して』

荒木ヨシ　一九六八「縄文式時代の網代編み」『物質文化』No.十二物質文化研究会　二〇～二六頁

荒木ヨシ　一九七〇「東日本縄文時代後・晩期の網代編みについて」『物質文化』No.一五　物質文化研究会　一二～一八頁

荒木ヨシ　一九七一「縄文式時代の網代編み（第三報・完結）」『物質文化』No.一七　物質文化研究会　二九～四〇頁

石川県伝統産業振興協議会　一九九七『石川の伝統工芸』

岩瀬由美・柿田祐二・宮田明　一九九八『軽海西芳寺遺跡Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター

植松なおみ　一九八〇「古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『物質文化』No.三五　物質文化研究会　二〇～三五頁

植松なおみ　一九八一「東北型網代圧痕について」『古代文化』第三三巻第二号　古代学協会　一七～二六頁

榎美香　二〇一五「奥能登の箕づくり」『民具マンスリー』第四七

巻一二号　神奈川大学日本常民文化研究所　一～一五頁
樫田誠・下濱貴子・能城修一・佐々木由香・小林和貴・鈴木三男ほか　二〇一六『八日市地方遺跡Ⅱ』第五・六・七部　小松市教育委員会
金沢市埋蔵文化財センター　二〇一六『平成二七年度金沢市埋蔵文化財調査年報』金沢市
金沢市埋蔵文化財センター　二〇一七『千田北遺跡現地説明会資料』金沢市
河合忍・山本直人・安英樹　一九九七『能登島町通ジゾハナ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
川添和暁　二〇一二「近畿・東海・北陸地方における編組技術の諸相」『月刊考古学ジャーナル』№六三六　ニューサイエンス社　一八～二二頁
川端敦子　一九八三「底部圧痕に関する基礎的報告」『北陸の考古学』石川考古学研究会　二一九～二三二頁
川端敦子・渡辺誠ほか　一九八三『御経塚遺跡』野々市町教育委員会
川畑謙二・岩本信一　二〇一四『大川遺跡』小松市教育委員会
川畑誠・沢辺利明ほか　一九九八『石川県羽咋郡志雄町荻市遺跡』社団法人石川県埋蔵文化財保存協会
木越美和子　一九九三「檜笠」『石川県大百科事典』北國新聞社　八二六頁
北野博司・鈴木三男・西尾典子ほか　一九九五『小松市荒木田遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
楠正勝ほか　一九八九『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』金沢市教育委員会
楠正勝・谷口宗治・前田雪恵・向井裕知　二〇〇九『中屋サワ遺跡Ⅳ・下福増遺跡Ⅱ・横江荘遺跡Ⅱ』金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）
工藤雄一郎編　二〇一七『さらにわかった！　縄文時代の植物利用』新泉社
黒沼保子　二〇〇九「編組製品における木本割裂き材の利用について」『奈良教育大学学術リポジトリ』（http://hdl.handle.net/10105/914）奈良教育大学
公益財団法人石川県埋蔵文化財センター　二〇一七『加賀市大菅波コショウズワリ遺跡現地説明会資料』
小林行雄　一九六四「編物」『続古代の技術』塙書房　一〇一～一八六頁
佐々木花江・妹尾裕介・横山方子　二〇一七『金沢大学構内遺跡―角間遺跡、宝町・鶴間遺跡―』金沢大学埋蔵文化財調査センター
杉山寿栄男　一九四二『日本原始繊維工芸史』原始篇・土俗篇　雄

山閣
辰口町教育委員会　一九七八『茄生遺跡』
田中孝之　一九九三「小松表」『石川県大百科事典』北國新聞社　四一九頁
谷口宗治・谷口明伸・向井裕知　二〇一〇『中屋サワ遺跡Ⅴ』金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）
坪井正五郎　一八九九「日本石器時代の網代形編み物」『東京人類学会雑誌』第一六一号　東京人類学会　四四〇～四四四頁
出越茂和・谷口宗治・前田雪恵　二〇〇二『大友西遺跡Ⅱ』金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）
鳥浜貝塚研究グループ一九八五『鳥浜貝塚』五　福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館
中田光明　一九九三「河内村」『石川県大百科事典』北國新聞社　三〇六～三〇七頁
中村俊亀智　一九七七「中部地方タケカゴ細工の諸相」『国立民族学博物館研究報告』二巻二号　国立民族学博物館　三五一～三七六頁
中森茂明・安中哲徳　二〇一五「一針C遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第三四号　公益財団法人石川県埋蔵文化財センター　二〇～二三頁
中屋克彦　二〇一八a「八日市遺跡」『平成二九年度発掘速報会いしかわを掘る　当日資料』石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター　二-一～六頁
中屋克彦　二〇一八b「八日市地方遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第三九号　公益財団法人石川県埋蔵文化財センター　八～一一頁
西野秀和・岡本恭一ほか　一九八九『金沢市米泉遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
橋本正博・福海貴子・宮田明　二〇〇三『八日市地方遺跡Ⅰ』小松市教育委員会
林大智　二〇一八「八日市地方遺跡」『平成二九年度発掘速報会いしかわを掘る　当日資料』石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター一-一～四頁
久田正弘・中川律子・本田秀生・佐々木由香　二〇〇八「白江梯川遺跡の琴とかごについて」『石川県埋蔵文化財情報』第一九号　財団法人石川県埋蔵文化財センター　五三～六九頁
堀川久美子　二〇一一「日本における遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『植生史研究』第二〇巻第一号　日本植生史学会　三～二六頁
本田秀生　二〇一二「北陸地方の編組製品」『シンポジウム　縄文時代の編組製品研究の到達点―地域性と素材に注目して』あみ

もの研究会　二九～五七頁
松永篤知　二〇〇四「東アジア先史土器の「敷物圧痕」分類について」『金沢大学考古学紀要』第二七号　金沢大学文学部考古学講座　九九～一〇八頁
松永篤知　二〇〇八ａ「縄文土器底部の「敷物圧痕」について」『考古学雑誌』第九二巻第二号　日本考古学会　一～四八頁
松永篤知　二〇〇八ｂ「縄文時代草創期の編物技術」『縄文文化の胎動』津南町教育委員会　七三～七五頁
松永篤知　二〇一三ａ「東アジア先史時代の植物質編物の研究」『名古屋大学学術機関リポジトリ』（http://hdl.handle.net/2237/17973）名古屋大学
松永篤知　二〇一三ｂ「縄文・弥生時代の編物―北陸地方を中心に―」『埋文とやま』vol.一二五　富山県埋蔵文化財センター　四～五頁
松永篤知　二〇一四「編物・縄類と縄文土器底部の「敷物圧痕」」『小竹貝塚発掘調査報告』第二分冊　公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　一一～一八頁
松山和彦・三浦ゆかり　二〇〇一『金沢市藤江Ｂ遺跡』財団法人石川県埋蔵文化財センター
南久和ほか　一九九三『金沢市馬替遺跡』金沢市教育委員会
村上真寿美（むらかみますみ名義）　二〇〇七『なあげそうけ』モース（モールス），エドワード・シルヴェスター　一八七九『大森介墟古物編』東京大学法理文学部
森理恵・櫻井あゆみ　二〇一二「近代日本における編物の変遷の一側面『日本家政学会誌』Vol.六三№五　日本家政学会　二二五～二三六頁
柳原梢子　二〇〇八「縄文時代のかごの研究」『東京大学考古学研究室研究紀要』第二二号　東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室　一～四〇頁
山本直人　一九八六「底部圧痕・編物・縄」『石川県能都町真脇遺跡』能都町教育委員会　二四八～二五九頁
山本直人　一九八九「石川県におけるワラ・タケ以外のカゴ類」『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会　三九～六〇頁
山本直人　一九九〇「木製品」『小松市高堂遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　一六九～一八一頁
湯尻修平・山本直人ほか　一九八七『小松市中海遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
横山純子　二〇一六「一針Ｃ遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第三六号　公益財団法人石川県埋蔵文化財センター　一六～一九頁
横山純子　二〇一八「大菅波コショウズワリ遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第三九号　公益財団法人石川県埋蔵文化財センター　一八～一九頁

横山そのみほか　二〇一七「平成二八年度下半期の出土品整理作業」『石川県埋蔵文化財情報』第三八号　公益財団法人石川県埋蔵文化財センター　二二～二四頁
渡辺誠　一九七六「スダレ状圧痕の研究」『物質文化』№二六　物質文化研究会　一～二三頁
渡辺誠　一九九四「編み物の容器―籠と筌・箕―」『季刊考古学』第四七号　雄山閣　三五～三八頁
渡辺誠　一九九六「マタタビ製のカゴ類」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』№一二　名古屋大学　八三～九二頁